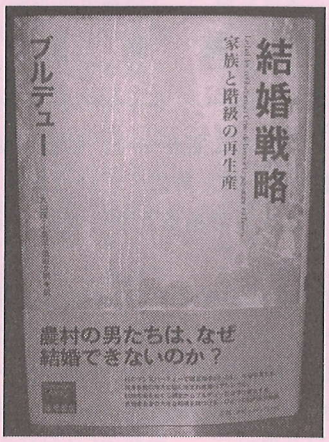
読書

ピエール・ブルデュー
『結婚戦略ー家族と階級の再生産』
丸山茂・小島宏・須田文明訳（藤原書店、2007年）

丸山 茂

社会学者ピエール・ブルデューは、1930年にフランスのピレネー地方に生まれ、1964年にフランス国立社会科学研究院教授となり、1981年からはコレージュ・ド・フランスの教授も務めた。惜しまれながら2002年に没したが、社会学においてばかりでなく、晩年には反グローバリズム運動の思想家としてもその影響を広く世界に及ぼした人物である。

ブルデュー社会学が日本で注目を集め始めたのは1980年代半ばである。当時すでに、彼が主催してヨーロッパ社会学センターから出版された ACTES DE LA RECHERCHE en sciences socials は、社会学方法論の革新を実践する雑誌として世界の注目を浴びていた。日本で社会科学方法論の転換や新たなフランス思想として広く知られるようになったのは、その雑誌からとったとおもわれる「ACTE アクト」（日本エディタースクール）という雑誌が1986年に出され、ついで1988年におそらく彼の最初の翻訳書である『実践感覚』（みすず書房）が出版されたことによってである。



私が大学院時代に所属した講座は、伝統的に社会学や人類学と法学とを結びつける法社会学的な家族法学を特色としていて、青山道夫、有地亨両先生によって、エンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』に影響を与えたL.H.モルガン『古代社会』（岩波文庫）や、B．マリノウスキー『未開社会における犯罪と慣習』（新泉社）、M．モース『社会学と人類学』（弘文堂）の訳書を上梓し、当時の西欧諸国の社会科学の要諦となる必読文献を日本にひろく浸透させてきた。

実は、1972年のアナール誌に掲載された家族に関する興味深い論文があるといわれ、ブルデューの“Les strategies matrimoniales dans le systeme de reproduction”の論文を渡されたのは大学院時代の有地亨先生であった。その後はブルデューの難解なこの論文に難渋し、手を焼いた。大学に赴任後しばらくして研究会で報告し、1986年に判例タイムスに「家族のストラテジーーピエール・ブルデューの家族研究」（拙著『家族のストラテジー』御茶の水書房所収）として紹介する機会を得た。この紹介は、法学者よりはむしろ社会学者に多く読まれてしばしば引用などもされ、ブルデュー研究の先駆けとして、私が書いたものでは初めて認知されたものではなかったかと思う。そこで紹介した、ブルデューの論文こそ本書『結婚戦略』の第二部に収められている「再生産システムにおける婚姻戦略」なのである。

ブルデューが着目されたのは、「戦略」、「プラチック」、「ハビトゥス」、「文化資本」、「象徴権力」など独自な用語を駆使しながら、教育、家族、メディア、政治、言葉、学界、芸術・文化など幅広い社会現象に鋭く切り込んだことにある。方法的には、マルクス主義や構造主義が胚胎する客体と主体、構造と行為のジレンマに対して、それらの二項対立を排し、構造と行為の関係を人々の意識的無意識的な実践（プラチック）＝戦略から再構築し、行為のレベルから構造が導き出され再生産される過程を発生論的に解明した点に大きな理論的意義を見ることができる。その方法は、教育の拡大と平等化が浸透する中でなお階級の再生産が行われる現実を解明した『ディスタンクシオン』をはじめとする一連の作品にも援用されている。

ブルデューの初期論文を集めた本書では、第一部「独身と農民の条件」第一章「旧社会における婚姻交換システム」と先にあげた第二部において彼の方法論が原初的な形で展開されている。その部分はその意味で、ブルデュー研究にとって貴重なものであり、彼を理解する上では不可欠の文献だと言うことができる。本書が扱っているのは、ピレネーのレスキー

ル村の旧社会における婚姻のもたらす再生産構造とそれが変化し婚姻市場の統一化がもたらす独身という社会現象の新たな局面である。ある特定の社会構造の再生産の諸要因を解明しながら、他方で、そのような「旧社会」が都市化、市場化の波に襲われながら、婚姻交換市場の拡大によって僻村農民男子に独身をもたらす諸要因が明らかされる。「独身」という現象が「慣習行動」や「象徴資本」などのさまざまな道具立てをとおして解明されていく過程は必ずや読者にスリリングな楽しみをあたえるであろう。

ところで、ブルデューは、晩年ネオリベラリズムとグローバリズムを批判し、市場原理至上主義によって公共財（福祉国家）、文化生産が破壊されること（例えば商業主義化する映画）に対して、知識人はインターナショナルな連帯を持ってこれに立ち向かわなければならないと訴え続けた。文化的営為が経済コストで評価されることはあってはならない、知識人・研究者は「文明を担う自負」をもたなければならないと彼は主張し続けたのである。このような彼の行為は、知識人・研究者に対して「市場独裁主義」の現実との位置取りを常に検証するという自省的な営為を求め、真に創造的な真実を語ることを要求するものであり、この行為を私たちは虚心に受けとめていかなくてはならない。

最後に、本書の翻訳は、3人の共訳という形で出版されたが、訳者あとがきに明らかなように、その多くが須田文明氏の労によっていることを述べておかなくてはならない。生前のブルデューや出版社とのねばり強い交渉に当たったのも須田氏である。須田氏は、ブルデューからあとがきに反グローバリズムについて必ず言及してくれと依頼されていた。本書でその約束は果たせなかったが、ここで反グローバリズムについて触れたのはそのような経緯もあったためである。

（法務研究科教授）

編　集　後　記

編集をしているといろいろなことに気がつく。社会では、しばしば「一人は全体のために」、そして「全体は一人のために」という言葉を聞く。音楽に例えれば、オーケストラがそれにあてはまるであろうか。いや、必ずしもオーケストラだけに限らないであろう。

毎年、3回発行予定で、2004年から始めたNewsletterも何時の間にか『第11号』を発行することになった。一人ひとりの研究者や実務家たちがそれぞれ自分の研究をしながらも、時間を割いて原稿を書いて下さる。オーケストラの演奏のように、調和と協力を持って、このNewsletterも引き続き、一層発展することを念願する次第である。〈正〉

法学研究所

所長　郷田正萬　教授
常任委員　池端忠司　教授
坂本宏志　准教授
諸坂佐利　准教授

神奈川大学法学研究所　ニュースレター　2008.3 / No.11

発行者：神奈川大学法学研究所　郷田正萬
〒221-8686　横浜市神奈川区六角橋3-27-1　TEL 045-481-5661（代表）　FAX 045-413-6141

印刷所（株）大成社
〒101-0061　東京都千代田区三崎町3-10-5　TEL 03-3263-3701